

— 分科会 —

# 小 学 校



(財)日本学校体育研究連合会

第2分科会

長野市立加茂小学校

第3分科会

長野市立通明小学校

第4分科会

長野市立三輪小学校

# 第 2 分 科 会

## 研究主題

仲間とかかわりながら、夢中になって運動に取り組む体育学習のあり方

～ 「わかる」「できる」喜びが味わえる授業づくり ～

長野市立加茂<sup>かも</sup>小学校

## 日 程

9:00 9:30 10:15 10:35 11:20 11:40 12:20 13:20 14:15 14:45 15:00

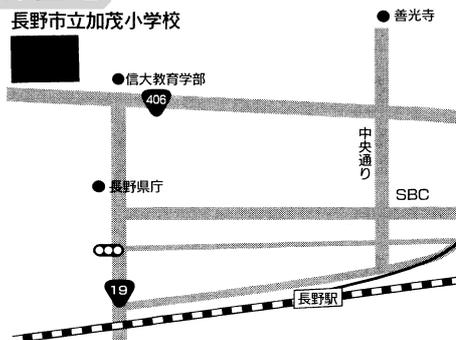
受 付	公 開 授 業 ①	休 憩	公 開 授 業 ②	休 憩	開 会 行 事 ・ 研 究 発 表	昼 食	研 究 協 議	指 導 助 言	閉 会 行 事
--------	-----------------------	--------	-----------------------	--------	---	--------	------------------	------------------	------------------

## 公開授業内容

第5学年 「器械運動」 体育館

第4学年 「表現運動」 体育館

## 学校所在地



## 交通機関

- 長電バスでは、加茂小学校に行けません。
- (1)長野駅善光寺口の駅前スクランブル交差点を渡る。
- (2)⑦番の戸隠方面バス乗り場（長野駅前郵便局隣）に行く。
- (3)73県道經由戸隠中社行き 8:08
- 74鬼無里行き 8:13、9:43
- 79地蔵平經由滝屋行き 8:03
- ※バスについて不明な点は、アルピコ交通長野営業所（026-254-6000）で確認して下さい。
- 長野駅から2.4km。徒歩約30分。信州大学教育学部の西側約200m

# 学 校 概 要

学校名	長野市立加茂小学校		
校長名	小 林 正 一		
学級数	10学級	児童数	225名
所在地	〒380-0871 長野市西長野185-6		
連絡先	TEL 026-234-1245 FAX 026-234-1246		

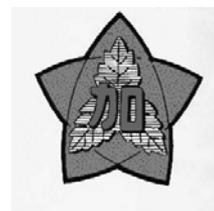
## 【学校紹介】

本校は、長野市西北に位置し、旭山、頼朝山、郷路山など豊かな自然に囲まれた地であると同時に、古くは戸隠と善光寺を結ぶ街道が栄えた歴史ある地である。

開校は大正3年、平成26年度には百周年を迎える。

校庭には、本校のシンボルであるどんぐりが植えられており、遊びの丘や中庭の樹木ともに子どもたちの憩いの場所になっている。

本校では、休み時間や放課後には校庭や体育館で元気よく遊ぶ子どもの姿が多く見られるが、一人ひとりが多様な遊びを経験しているわけではなく、運動に苦手意識を感じている子どもたちもいる。そこで、全校でマラソンに取り組んだり、「ワールドカップ KAMO 大会」「なでしこカップ KAMO 大会」など休み時間を利用したサッカー大会を企画したり、朝の全校体育時に「KAMO サーキット」「大相撲加茂場所」などを行うなどいろいろな運動を経験できる場を設定している。



## ◎学校教育目標

すすんでより高いものを求めて せいっぱいやりぬく

### 〈 目指す子どもの姿 〉

- ずくのある丈夫な子になる
- ねばり強く考えぬく子になる
- 美しさがわかり思いやりのある子になる
- 力を合わせて助け合う子になる

## 1 研究主題

仲間とかかわりながら、夢中になって運動に取り組む体育授業のあり方  
～ 「わかる」「できる」喜びが味わえる授業づくり ～

## 2 主題設定の理由

### (1) 本校の実態と課題

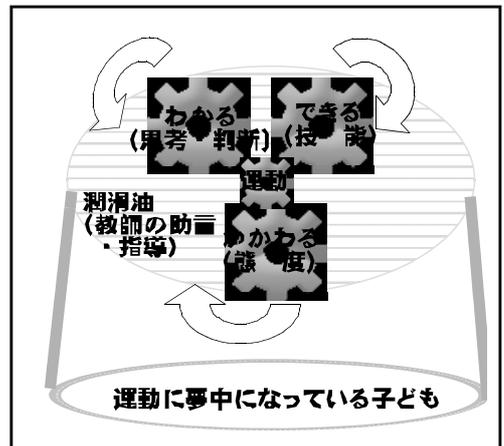
本校では全校研究テーマを「自らの生き方を拓く子どもの育成」とし、基礎基本の習得と体づくりをはかり、豊かなコミュニケーション能力を身につけることを重点に研究を進めている。子どもたちが、知識・技能の習得とともに豊かなコミュニケーション能力を身につけたとき、「すすんで より高いものを求めて せいいっぱい やりぬく」（本校学校目標）姿に近づくのではないかと考えている。

本校では、休み時間や放課後には校庭や体育館で元気よく遊ぶ子どもの姿が多く見られ、遊びの中身もボール運動系の遊び、鬼遊び、なわとび、一輪車遊び等多様である。また、全校でマラソンに取り組んだり、「ワールドカップKAMO大会」（休み時間を利用した学校主催のサッカー大会）に向けて練習に取り組んだりするなど、意欲的に体を動かす子どもの姿も増えてきている。

しかし、子どもたちは、一人ひとりが多様な遊びを経験している訳ではなく、どちらかという運動に苦手意識を感じている子どもたちもいる。このことから、幅広い経験と高い質や量の運動機会を保証し、運動の楽しさや心地よさを感じながら取り組めるような指導・助言を行っていく必要がある。子どもたちが運動の行い方を学ぶ中で、自分のイメージをもち（わかること）、仲間や教師とかかわりながら（かかわること）、体全体で表現したり技能を習得したりできる（できる）。このことが、互いに作用し合いながら繰り返されることで、運動に夢中に取り組む楽しさや心地よさを感じる姿につながっていくと考えている。

### (2) めざす子どもの姿

「祭り」の表現運動に取り組み、楽しげに踊っているように見えた太鼓グループのY君は、「動くことは楽しいけれど、これでいいのかわからない」と授業後につぶやいた。教師が「それはどういうこと？」と尋ねると、「花火やみこしの動きはなんとなく知っているからやっているけど、それでいいのかよくわからない」と答えた。そこで教師は、手足を巧みに使いながらいろいろな蚊の動きをしている高校生の作品を見せ、それとともに、動き方について「姿勢の高低」「移動の方向」「動きの速さ」などくずしにかかわる観点を示した。食い入るような表情で見ていたY君は、実際の場面で、大太鼓やお囃子の動きをエアで表現し、たこ焼きを売ったり食べたりする動きを、腕を使ったり立ち位置を変えたりしながらジェスチャーで表した。感想発表の場面では、「この前はど



が互いに絡み合い作用し合うこと（上図の歯車のように）により子どもたちはさらに夢中になって運動に取り組み、教師の指導・助言はこの歯車を滑らかにする潤滑油の働きをすることが昨年度までの研究から見えてきた。

今年度の研究では「わかる」「できる」「かかわる」が具現化される授業を構想し、その授業づくりの過程を通して、子どもたちが夢中になって取り組む体育授業の在り方を模索していきたいと考え、本主題を『仲間とかかわりながら、夢中になって運動に取り組む体育授業の在り方』とし、サブテーマを「わかる」「できる」喜びが味わえる授業づくりとした。

### 3 研究仮説

◎ このような子どもたちに

#### かかわりながら「わかる」「できる」喜びを味わい切れていない子どもたち

- 運動に積極的に取り組み、休み時間も体を動かして遊ぶことが多い子どもたち。
- 初めて経験する動きや発展的な動きになると、運動のイメージがもてなかったり、うまく体を動かせなかったりして、「できない」と感じてしまう子どもたち。
- 「できない」と感じてしまうと意欲がもてずあきらめてしまう子どもたち。
- 「できる」ことを実感し、教師や仲間から評価されることにより、さらに意欲をもち運動に夢中になって取り組む子どもたち。

◎ このような手だてをすれば

#### 教師の指導・助言

##### 【わかる】

- その単元を通しての子どもにつけたい力をとらえ、子どもの学習状況や意識から、その時間にあった課題を設定する。
- 子どもが運動のイメージをもったり、そのイメージがより具体的になったりするように、視覚的にも分かりやすく示し（映像、示範、プリント、説明など）、その動きのよさをとらせることができるようにする。

##### 【できる】

- 子どもが自分のイメージどおりに体を動かせるように、学習の場を工夫したり、教材化を図ったりしていく。
- 技能の習得から習熟へつながる場や時間を確保し、子どもができることに自信をもち実感をもてるようにしていく。

##### 【かかわる】

- 子どもたちが互いにかかわり合える、かかわりが生まれる授業展開を工夫する。
- 自己評価や相互評価の場を設け、互いのよさを認め合えるようにしていく。
- 子どものがんばりを認めたり、よいかかわりを賞賛したりして、かかわる内容や方法を分かりやすくするとともに、仲間と一緒に取り組む楽しさを味わえるようにする。

##### 【教師の姿勢】

- 子どもの実態やつけたい力をもとに、児童が意欲を持ち夢中になれる教材を選定しながら、授業を構想していく。
- 子どもの学習の状況を把握し、授業中も教師が積極的な働きかけをしていく（直接指導、声掛け、賞賛）。

◎ こうなるだろう

#### 運動に夢中に取り組み、楽しさや心地よさを感じる子ども

- 自分のイメージをもちながら、技能を高めようと運動に積極的に取り組むことができる。
- 自分の願いや課題に向け、活動の仕方を考えたり工夫したりしながら最後まで精一杯運動に取り組むことができる。
- 自分の技能の高まりから「わかる」「できる」ことを実感し、その喜びを味わいながら夢中になって運動に取り組むことができる。
- 仲間とのかかわりの中で、互いの願いを共有しながら、励まし合ったりアドバイスし合ったりすることができる。
- 互いの取り組みを認め合いながら、仲間と一緒に追究したり高まったりする楽しさを感じることができる。

#### 4 研究の重点

- (1) すべての児童が運動に夢中になり、「わかる」「できる」「かかわる」が保証される授業づくり

##### 【器械運動部会】

- ① 教材の工夫
  - ・器械運動で必要な感覚や動きの経験を図ったり、段階的なステップを踏んだりして技が習得できるように教材を工夫する。
- ② 教具の工夫
  - ・安全面や運動機会の保障を考慮したり、体格等の個人差や器具等に対する恐怖感に応じたりできるように場の設定を工夫する。
  - ・学習カードや情報機器を使用し、子どもの学習がスムーズになるように工夫する。
  - ・技の理解や技の習得を促進するような教具を工夫する。
- ③ 学習過程や学習形態の工夫
  - ・感覚づくりや動きづくりを保障し、段階的なステップを踏んで技が習得できるように学習過程を工夫する。
  - ・学級全体での学習，グループ学習，ペア学習，個別学習など，学習のねらいや授業展開等の状況に応じて，学習効果が最も期待できる学習形態を工夫する。

##### 【表現運動部会】

- ① 動きの構想と価値付け
  - ・子どもの動く姿やさらに良くなるアドバイスを構想する。また，空間・時間・体・仲間のくずしにかかわる良い動きの待ち受け，動きの良さの発見，良さの観点を示しながらの紹介・認め合いにより動きを価値付ける。
- ② 心の解放
  - ・毎時間の最初の体ほぐし運動，教師が率先して示範，仲間と動きを合わせて楽しんでいる子どもの賞賛，創作していかれそうなグループ編成，互いの良さの認め合いなどの指導を繰り返す，心の解放を促す。
- ③ イメージ
  - ・写真や音楽の視聴，イメージバスケット，模範作品，くずしのある良い動きの観点，教師の示範，ひとながれの動きの例，群の動きの観点，仲間の動きの紹介などによりイメージをもてるようにする。
- ④ スモールステップ
  - ・イメージバスケット，イメージカルタ，複数人での動き，ひとながれの動き，動きやすいカテゴリー，モチ

ーフ作り，群の動きなどのスモールステップを設ける。

- ・準備運動や体ほぐし運動でのドリル練習を毎時間当初に取り入れる。

## (2) 授業改善のための授業評価のあり方

### ① 評価方法

子どもの学びを具体的な姿でとらえながら，確認及び評価していく。

- A 授業場面の観察記録（観察法）・相互作用行動の記録（観察法）
- B 学習成果の検討
- C 子どもの学習記録（学習カード）及び日記の文章記録
- D 形成的授業評価法

## 5 研究の内容と実践事例

### (1) すべての児童が運動に夢中になり，「わかる」「できる」「かかわる」が保証される授業づくり

#### 【器械運動部会】

〔事例1〕新たな教材（段階的なステップを踏んだ教材）との出会いを通して，後転ができるようになった事例（4年 4月 マット運動「後転にチャレンジ」）

3年生までの学習の中で，後転ができなかったY君。4年生の学習でも後転ができるようになりたいと後転に挑戦する姿が見られた。技のポイントが記された学習カードや教師の示範・説明をもとに，「後転は手のつきはなしが大事なんだ」「勢いをつけなきゃダメなんだ」と学習カードの自己評価に記していた。そこで，「ゆりかご」や「坂マット（傾斜の利用）」を学習に取り入れたが，坂マットではできても，平面のマットではなかなか後転できないY君であった。Y君の課題は，本人の捉えのように後方へ倒れ込む勢いと，その勢いを回転に活かさないことだった。そこで，「後転姿勢」からセーフティマットに向かって，背中越しに跳ぶという教材を考案し，準備運動に組み込んだ。後ろが見えないので，当初，怖々と腰掛けるようにしていたY君だったが，セーフティマットのクッション性に安心感を覚えると，思い切り後方へ跳べるようになっていった。そして，徐々に，足やお尻も自然と浮き上がるようになり，クルッと後方に回れようになっていった。次の段階として，普通のマット上で，3～5足分離れた所から「マット上にお尻をつけてから後転」という課題に取り組んだ。すると，後方へ倒れ込む勢いがつき，回転に活かせるようになり，後転ができるようになった。



【考察】自分の課題を「後転は手のつきはなしが大事なんだ」「勢いをつけなきゃダメなんだ」と捉えているが，平面のマットで後転ができないY君は，「わかっている」が「できない」という状態であったと考えられる。「腰のズレ」で勢いを得る後転特有の運動技術に着目した新たな教材と，「後方に跳んでから，両手をマットにつくこと」「マットについたら，逆上がりのようにクルンとお尻を引き上げる」といった教師の助言により，Y君は，後方へ勢いをつけて倒れ込む感覚がわかり，後転ができるようになったと考える。その後Y君は，学習のふりかえりの場面で，「3年生でできなかった後転が，スムーズに速く回れるようになった」と自分の技能向上の喜びを伝えていた。

〔事例2〕 恐怖心を和らげ、動きの補助をする教具を使用することで、苦手だった鉄棒に積極的に挑戦した事例（4年 9月 鉄棒運動「ホッ・クル・ピタッ！～上がって-回って-下りる～）

鉄棒学習に消極的なK子。それまで、ほとんど「技」に挑戦した経験がなく、鉄棒で逆さになると落ちそうで怖いということだった。そこで、鉄棒の下にセーフティマットを敷いたことで安心感を持ち、教師の補助を受けながら、コウモリふりや前回り下りに取り組んだ。徐々に回転や逆さ感覚が養われ、本人も少しずつ自信を持ち始めた。次の時間には補助なしで、コウモリふりや前回り下りができるようになった。

少しずつできるようになったことで、自信が芽生えたK子は、逆上がりに挑戦した。補助ベルトを使ってもできなかったが、グループの仲間に背中を押してもらおう中で、蹴り上げるタイミングをつかみ、一人でも上れるようになった。その後、逆上がり補助器を使って、どんどん上達する姿が見られた。



【考察】 経験不足から、鉄棒にも近づけなかったK子さんは、鉄棒から落ちるのではないかとこの恐怖感を持っていたが、セーフティマットを下に敷くことで安心感を憶えたようである。子どもの積極的な挑戦が、「わかる」「できる」ための前提条件となる。やさしい動きから少しずつ取り組みながら、「あ、できた。こんな感じの動きだ。」という経験をしたことで、少しずつ自信をもてた。また、逆上がりに挑戦する中で、動きを補助する教具（ベルト、補助器）を使用したり、仲間の補助を受けたりすることが、技の習得に一步步近づいていく要因になったと考えられる。

〔事例3〕 スモールステップによる学習過程とペア学習（学習形態）を取り入れ、台上前転に取組んだ事例（4年 11月 跳び箱運動「ホップ・ジャンプ・こえて・ピタッ」）

前時にステージからの前転下りがうまくいかなかったR君は、教師の台上前転の示範を見て、「ちょっと怖くね？」「横に落ちたらいっかんの終わりだよ」と不安を口にしていた。一段の跳び箱にマットをかぶせた「安心山」では、足を跳ね上げる勢いがなく、回転が途中で止まり左側に落ちてしまう。そこで教師が、「頭をちょっと手前につけて、思いっきり足を上げる」と助言しながら補助をすると、きれいに回転することができた。教師の「よし、できた」という声がけに、学習カードに○をつけ、その後「安心山ができて、よかった。手を打つといい。台上前転ができるようになりたい」と記入した。



第3時、3段の台上前転に挑戦したR君であったが、まっすぐ前転できず着地が決まらなかった。この時間は、安心山でまっすぐ回れることを確認してから3段に挑戦した。着地が決まらなかったのは、頭が跳び箱の真ん中に着いてしまうためだった。そのための踏み切りの仕方をグループのKさんにアドバイスしてもらい、着地が不安定な状態だが、何とか台上前転することができた。その後のふりかえりでは、「（3段で）台上前転がうまくゆっくりと着地できてよかった。あまり勢いをつけすぎると跳び箱の手前に頭が着かないから、ちょうどよくふみ切るといいと、Kさんがアドバイスしてくれた。次の時間はブランコ跳びで、手をちゃんと着いて、高くジャンプして、着地を決めたい」と記入した。

第3時、3段の台上前転に挑戦したR君であったが、まっすぐ前転できず着地が決まらなかった。この時間は、安心山でまっすぐ回れることを確認してから3段に挑戦した。着地が決まらなかったのは、頭が跳び箱の真ん中に着いてしまうためだった。そのための踏み切りの仕方をグループのKさんにアドバイスしてもらい、着地が不安定な状態だが、何とか台上前転することができた。その後のふりかえりでは、「（3段で）台上前転がうまくゆっくりと着地できてよかった。あまり勢いをつけすぎると跳び箱の手前に頭が着かないから、ちょうどよくふみ切るといいと、Kさんがアドバイスしてくれた。次の時間はブランコ跳びで、手をちゃんと着いて、高くジャンプして、着地を決めたい」と記入した。

【考察】 R君は、運動のポイントをとらえる能力に長け、「わかる」ことにおける理解が早い。体育の学習に対しても肯定的な気持ちを持っていた。しかし、技能習得に苦勞する傾向があり、学年初めのころは、馬とび・タイヤとびができずにいた。台上前転の示範を見て、不安

を口にしたR君だったが、安心山があることによって、その不安や恐怖心がなくなったと考える。また、踏切の勢いが足りず、回転スピードが落ちてしまうR君に、教師の指導があったこと、ステージ跳び乗り前転に繰り返し取り組んできたことにより、不安定ながら跳び箱の上で回転することができ、「手を打つといい」というイメージを持つことにつながったと考える。さらに、3段の跳び箱に挑戦する中で、ペアとのかかわりから、「ちょうどよくふみ切るといい」とアドバイスを受けたことで、コツをつかみ、学習が深まったと考える。

#### 【表現運動部会】

〔事例4〕 仲間の動きを見ながら、教師の価値付けにより動きの中に含まれているくずしに気づき、自分たちの動きに取り入れていった事例

（4年 6月 表現運動「創り上げよう 僕らの探検王国」）

他の動きを見合う場面で教師は、無人島グループに「海賊との戦い」の場面を見るように指示した。教師は、斬られているH君の動きを指し、「H君、ねじれたまま倒れているね」と見ている子どもたちに声をかけた。続いて「Mさんも倒れているね。ねじれたままでいいね」と声をかけた。次に教師は、ウルルングループの「大きな岩が落ちてきた」の場面を見るように指示した。教師は、「散らばり方がいいよね。いろんな方向にサッと早く散らばったよね」「ゆっくり動いたり、早く動いたりしているね」と声をかけた。



その後、グループでの話し合いの場を設けた。無人島グループでは、底なし沼にはまる場面の動きについてTさんは、「M君が落ちて助けて、それから半分の人が引っ張って、引きずり込まれるでしょ、残った4人で助ける」と言って動き方について意見を出したり、ユラユラ橋についてT君が、「ゆっくり渡って行って、最後に走る」と話したりした。

最後の発表会の場面で、以下のような新たな動きが見られた。

「ユラユラ橋」…バランスをとる動きをしながら、次の一步を踏み出すまで動かず、間をとる。渡りきる直前に小走りをした仲間に渡り終えた人が手を差し出す。渡り終えてジャングルを歩く場面で、ライオンに襲われ、素早く四方に散らばる。

「底なし沼」…一人で残った全員で助けようとする。3人が沼に落ち、1対1が4組ある状態で引き上げる。2人が引き上げられ、1対3が2組ある状態で引き上げる。1人が引き上げられ、再び残りの1人を全員で引き上げる。

「海賊」…戦いで斬ったT君はその後動かずに立ちすくみ、斬られたMさんやH君はスローモーションで倒れていく。

「渦」…渦の中心に向かって集団で引き込まれていく場面で、回転のスピードがはじめ非常に遅く、次第にスピードを増しながら中心に集まっていく。

【考察】 教師は、仲間や他のグループとかかわりながら、さらに新たな動きやくずしについてイメージを広げて、複合的なくずしを取り入れた動きをしてほしいと願っていた。そこで、互いの動きを見合ったり、グループ内で話し合ったりする場面を設け、それぞれの動きについて、教師が動きを価値付けた声かけをすることで、他のグループや他の子の意見に影響を受けながら、子どもたちが動きについて新たなイメージをもって創り上げていくことができるだろうと考えた。授業の中で教師は、H君の体のくずしに着目し、それに影響を受けたMさんを見て、「Mさんも倒れているね。ねじったままでいいね」と声をかけた。ウルルン

ループの「岩」でかけた声がけは、空間や時間のくずしにかかわっている。こうしたくずしにかかわる工夫を促し続けることにより、話し合いの場面でもTさんやT君から仲間・空間・時間のくずしにかかわる意見が出てきていると考える。

授業後、無人島グループのM君は、「Tさんに、渦の場面で自分でもちょっとずつ回りながら、だんだんスピードを上げて、渦の中心に回りながら行こうと言われたのでためてみたら、『もと→渦みたいではなかった→渦らしくなった』」と学習カードに書いた。この言葉から、M君をはじめとしてグループの子どもたちがそれぞれの場面で、仲間からのアドバイスを受けたことにより、動きの質が上がり、自分でもそれを実感することができたと考える。

〔事例5〕 体ほぐし運動での心にかかる負担を徐々に増やしていきながら、心を解放して表現していく雰囲気を楽しんだ事例（6年11月 表現運動「創り上げよう 僕らの祭り」）

表現運動は未経験の6年生が、心を解放して創作活動することは困難と考えた教師は、授業最初の15分は、いろいろな体ほぐし運動をして心を解放できる雰囲気を漂わせたいと考えた。

そこで第1・2時は、ペアになり新聞を使って動く「新聞紙ワールド」を行った。子どもたちは、ペアの子がもつ新聞の動きに合わせて動くので、「それ、無理だよ」などと言いならも自分の体を新聞に合わせてようと楽しんでいった。第3時は仲間とのつながりを工夫していく「どんどこトンネル」を行った。はじめは簡単なつながり方が多かったが、次第に背中と頭を合わせたり、横になって足を上げたりするなど工夫した動きが見られるようになってきていた。第4時は行列の先頭の動きを真似る「シグナルウォーク」を行った。先頭になった子どもたちは当初はまっすぐに歩くことが中心だったが、教師の「浅田真央」などの指示を受けてジャンプやスピンの動きをしたり、「大変だ、亀の裏返し」の指示で一斉にひっくり返って足をばたつかせたりするなど、動きを楽しんで行えるようになってきた。その結果、授業後半の30分でも、花火のグループがすぐに集散の動きを取り入れて「スターマイン」を創り上げたり、太鼓グループでは二つのグループが合体して創作したりするなどの活動が見られた。



【つながり方を工夫するどんどこトンネル】

【考察】「新聞紙ワールド」は、新聞紙の動きを真似ればよく、比較的動きやすい運動であると考えられる。また、半分の時間は動きを創らずに新聞を操っていればよいので、表現運動を未経験の子どもたちにとっては心の負担が半分になると考えられる。「どんどこトンネル」は自分のときだけつながりを考えればよいので心の負担が少なく、最後には人間モニュメントが出来上がるので、創り上げる喜びを味わえる運動であると考えられる。「シグナルウォーク」は、先頭の人の動きを全員が真似をするので、先頭になると心の負担がかかる運動である。教師が動き方について「浅田真央」などの指示を出すことで、子どもたちは何をするか考える負担がなく、どう動くかを考えることに集中し楽しめたのではないかと考える。

このように、どう動くかについて「見えるものの真似をする」→「限定した動き（つながり方）を考える」→「想像できるものの動きを考える」と心にかかる負担を徐々に増やしていくような体ほぐしの運動のつなげ方が、表現運動が未経験であったり、なかなか動けなかったりする子どもたちにとっては有効であったと考える。

〔事例6〕 動きの苦手な子どもが、なりきりやすさを基準に、スモールステップで段階をあげていくことで、生き生きと楽しく動きを創り上げていった事例（1年11月 表現遊び「たんけん はっけん 1Aワールド」）

教師は1時間の中で前時の振り返りの後、「ゾウ」→「キリン」→「カンガルー」→「亀」→「フラミンゴ」という順番で動物を提示していった。教師の声がけや仲間の動きを見ながら右手を大きく振り、鼻を振る象を表現するS君。「キリン」では、キリンの高さ・首の長さを手を上に伸ばすことで表していた。けんかの場面で教師は、首を絡ませてけんかをするキリンの写真を見せ、「長い首をふってケンカするんだよ。みんなが普段やっているようなバシバシじゃないんだよ」と声をかけると、首に見立てた手を仲間とからませながら、首を曲げてケンカをしている姿を表現し始めた。その後もそれぞれの場面でその動物になりきって動きを表現していった。



【鼻を大きく振る象】



【けんかするキリン】



【鷹から身を守る亀】

【考察】教師は、それまで体を使って表現することがあまり得意でないS君が、動物になりきって動き出してほしいと願っていた。そこで、提示する動物の順番について、①1年生誰もが知っている、②体に特徴的な部分がありその動きを表しやすい、③高低の動きや、ねじれの動きなどが出現しやすい、④走り回ることにつながらないなどの観点から少しずつスモールステップを踏んでいくことを考えていた。まず、特徴的な鼻の動きのある象を取り上げ、次に高さで有名なキリンを取り上げた。そしてその一つ一つの動物の中で、基本的な動きが表せた後に「大きな岩」「けんか」「木を飛び越える」「鷹におそわれる」「羽を繕う」などの動きの状況を設定してけば、つまづきながらも動きを創り上げていくことができるだろうと考えた。こうした教師のスモールステップを踏んだ手立てで、動きの乏しかったS君も、それぞれの動きの中で自ら動きを創り上げることに繋がったと考えられる。

また、1時間の授業の中でスモールステップを踏むだけでなく単元の中でも、第1時は身近で見る触るなどの体験したことのある生き物、第2時は体験したことのある生き物の中から水中の生き物、第3時はテレビは本などで慣れ親しんでいる動物というように少しずつ段階を上げたことで子どもたちはスムーズに生き生きと表現に取り組んでいくことができたと考えられる。

## (2) 授業改善のための授業評価のあり方

### 【4年 11月 跳び箱運動「ホップ・ジャンプ・こえて・ピタッ」の授業記録より】

#### ① 授業場面の観察記録・相互作用行動の記録

#### 【コーディングシート】

授業場面		観察記録		相互作用行動	
場面	内容	観察	記録	行動	記録
導入	跳び箱運動の導入	1	2,3		
展開	跳び箱運動の展開				
まとめ	跳び箱運動のまとめ				

授業全体  
 準備時間(エ) 2分  
 準備時間(A1) 2分  
 運動時間(A2) 2分  
 マチット(M) 2分

【授業記録】

教師の指導	時間(分)	Mさんの様子
1 「おー、(手の位置) 今ここな。ここだよ(それより前方をさす)。(安定してできる横4段の跳び箱へ促す)	10:24	・縦4段開脚跳びができない。 × ・跳び箱の上にまたがってしまう。 ○ ・横4段開脚跳びができる。 ○
2 「うまい。」	12:00	・横4段開脚跳びができる。 ○
3 「あ!できた(やったねと両手でタッチ)」	12:35	・縦4段開脚跳びができる。 ◎

この時間の、Mさんと教師の相互作用との関係を検討する。授業はじめの「たしかめタイム」では、自信をもって準備運動に取り組んだMさん。しかし、苦手意識のある縦開脚跳びへの挑戦にはためらいがあり、一回目の挑戦では跳び越せなかった。教師は、「おー、(手の位置) 今ここな。ここだよ」(矯正フィードバック)と手の着く位置を遠くにするように助言し、Mさんが安定してできている横開脚跳びへの挑戦を促した。横開脚跳びを上手に跳び、教師から、「うまい」(肯定的フィードバック)と褒められ、再び縦開脚跳びに挑戦し、見事に跳び越すことができた。笑顔で教師とハイタッチをし、その後も、意欲的に学習に取り組んでいった。

【5年 6月 体づくり運動「チャレンジペース走でパワーアップ」の実践における分析より】

② 学習成果の分析について

- ・走距離を伸ばした子どもが 26人/29人 だった。
- ・走距離のクラス平均(一人あたり)は、966.6m→1019.4mだった。  
\* 最高は、1160m→1380m
- ・走距離の伸びのクラス平均(一人あたり)は 52.8mであった。ほぼ1/3周である。1周以上(128m)の伸びを示したのが、5人。最高で220m伸ばした子どももいた。

③ 子どものふりかえり(日記)より

【第1時(はじめの5分間走) Mさんのふりかえり】

走る前は、ドキドキと緊張感が。何周走れるかな、最後までがんばろうなどと、どんどん、いろいろなことが思い浮かびました。いよいよスタートです。大丈夫だなと初めは思っていたのが、どんどんきつくなりました。でも、最後まで歩かないぞ!と思いました。歩きそうになった時、Sくんが応援してくれたので、がんばれました。次は、8周を走り切りたいです。

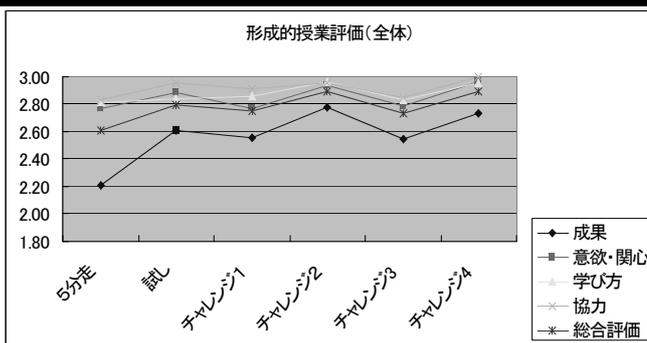
【第7時(まとめの5分間走) Mさんのふりかえり】

今日は、5分間走をやりました。どれくらい走れるのか楽しみでした。でも、前と距離は一緒でした。私はペースを抑えていたから、先にもう少し出しても良かったです。前と距離が一緒でくやしかったけれど、前より体力が結構つきました。前は、走って「もうダメ!!」と思いながら走っていたけれど、今日はまだいけそうな気がすごくしていました。次は5分ではなく、7分か8分にしてやってみたいです。それか、5分間走をもう一回やって、自分の記録を絶対越したいです。

④ 形成的授業評価

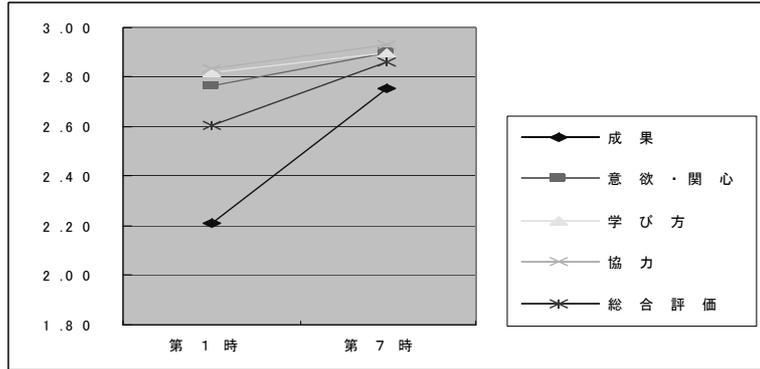
・クラス全体

左記は、本単元の5年生の形成的授業評価である。単元を通じ、およそ右肩上がりの変化を示しており、この学習が子どもたちに受け入れられ、積極的な挑戦を生んだことがうかがえる。



・第1時と第7時に実施した5分間走に見られる子どもの意識の変容

	第1時	第7時
成果	2.21	2.76
評価	3	5
意欲・関心	2.77	2.90
評価	3	4
学び方	2.82	2.90
評価	5	5
協力	2.83	2.93
評価	4	5
総合評価	2.61	2.86
評価	4	5



まったく、同じ流れの「5分間走」の授業にもかかわらず、第7時では、大きく授業評価が上がっている。「5分間走り続ける」ということに対してのできるという自信・持久走に対する肯定的な姿勢・ペースの大切さがわかり、仲間とのかかわりが深まったことでの学習効果が表れたと、この結果から推察される。体力の高め方をよく理解し、その必要性を感じ、自主的に取り組んでいける態度と実践力の素地が養われつつあると考える。

## 6 研究の成果と課題

### (1) 成果

- 教師が、その学習の中でつける力を明確にし、スモールステップを踏まえた教材の工夫等を積極的に導入する。また、必要に応じて新たな教材づくりをするなどしたことにより、子どもたちが学習に見通しをもって取り組み、「できそうだ」「できた」を実感する姿につながった。
- 教師が、励まし・矯正的フィードバック（助言及び直接的な指導）及び肯定的フィードバック（賞賛、評価）を積極的に行い、子どもたちの動きの良さを価値付けたこと、映像、示範、プリント、説明などで視覚的にもわかりやすく示し、動きの良さをとらえることができるようにしたことは、子どもが運動のイメージをより具体的にもつ姿（わかる姿）につながり、自分の課題に向けて意欲的に取り組む姿が見られた。
- ペア学習、グループ学習、話し合いの場を設けるなど、子どもたちが互いにかかわり合える、かかわりが生まれる授業展開を工夫することにより、互いに励まし合ったり、動きの様子を伝えたりする子どもたちの姿が見られた。

### (2) 課題

- 教師の適切な教材理解や積極的なかかわりにより、子どもたちが夢中になって運動に取り組む姿は見られたが、さらに、すべての児童に「わかる」「できる」「かかわる」が保証される授業づくりを目指していく必要がある。
- 子どもたちが、互いに励まし合ったり、動きの様子を伝えたりするだけでなく、情意行動が多く出現し、授業の雰囲気がよくなる中で、仲間と共に学びながら、かかわりを深めていける授業展開のさらなる工夫が必要である。

# 第 3 分 科 会

## 研究主題

一人一人ができた喜びを感じ、かかわり合いながら夢中になって取り組む体育学習  
 ～「小さなできた」を積み重ねた段階的な学び、  
 「できた」経験を生かした系統的な学びの在り方 ～

つうめい  
 長野市立透明小学校

## 日 程

9:00 9:40 10:25 10:50 11:35 12:00 13:00 13:15 14:20 14:50 15:00

受付	公開授業 ① (2年)	休憩	公開授業 ② (5年)	移動	昼食	開 会 式	発 表 ・ 質 疑	協 議 ・ 指 導 助 言	閉 会 式
----	-------------------	----	-------------------	----	----	-------------	-----------------------	---------------------------------	-------------

## 公開授業内容

公開授業① 第2学年 「ポップコーン・チャレンジ」 (第1体育館)

公開授業② 第5学年 「チャンスエリア・バスケットボール」(第1体育館)

## 学校所在地



## 交通機関

- 最寄駅  
 JR・しなの鉄道「篠ノ井駅」下車 徒歩7分
- 経路  
 長野駅  
 ↓ 所要時間13分  
 JR・しなの鉄道「篠ノ井駅」下車  
 徒歩7分

# 学 校 概 要

学校名	長野市立通明小学校		
校長名	石塚 弘登		
学級数	26学級	児童数	755名
所在地	〒388-8006 長野市篠ノ井御幣川 270		
連絡先	TEL 026-292-0100	FAX	026-292-1923

## 【学校紹介】

### ◎ 学校の沿革

- ・ 創立 1873 年（明治 6 年 11 月 30 日）御幣川 1 2，宝昌寺本堂に開校し現在に至り，本年創立 138 周年を迎えた。

### ◎ 校章の由来



通明小学校が現在の地に移設されたころ，校地の周りにたくさんの桐の木を植樹した。毎年，5 月になると美しい紫色の花をつけた。以来，この桐の花の「紫色」が，通明小学校のスクール・カラーとして使用され「桐の木」は本校のシンボルとなっている。



### ◎ 教育目標

自ら考え，自ら行う，かがやく子ども

(1) やさしく (2) かしこく (3) たくましく

### ◎ めざす学校の姿

#### ○ 友と手をとりあって，伸びる心と体

- (1) 豊かな心 人間関係力や情操面の向上を図る
  - ・響き合う歌声と心を耕す読書指導
  - ・もの・人・ことを大切にすること
- (2) 確かな学力 学ぶ意欲を育て学力を向上させる
  - ・基礎基本の定着
  - ・学習意欲の向上
- (3) 健やかな体 健康を増進し健やかな体を育む
  - ・たくましく生きる体力づくり
  - ・健康な体づくり
  - ・安心安全な学校 ☆1校1運動「通明チャレンジ 2011」

### ◎ 特色ある教育活動 ～大成初等学校(韓国)との交流～

1998年 長野オリンピックを機に始まった一校一国運動として，現在も本校は韓国の大成初等学校との交流活動を続けている。毎年，7 月には「アンニョンハセヨ週間」として，異文化理解の学習をしている。そして，両校の児童 10 名が隔年ごと相互に訪問し 5 日間のホームステイをして，文化や子どもたちの学校や家庭での生活について，相互理解を深めている。

## 1 研究主題

「一人一人ができた喜びを感じ、かかわり合いながら夢中になって取り組む体育学習」  
～「小さなできた」を積み重ねた段階的な学び、  
「できた」経験を生かした系統的な学びの在り方～

## 2 主題設定の理由

本校の子どもたちは運動が好きであり、休み時間にはドッジボールや大縄跳びのクラスマッチに向け、友だちと積極的に運動へと取り組み、楽しんでいる。また、好きな教科のアンケートにおいても体育は上位に位置すると共に、多くの子どもたちが体育の授業を楽しみにし、意欲的に取り組んでいる。しかし、気になる点もある。それは、初めて体験する技や、発展させた技などの課題に直面した時、「ちょっと難しいな、どうやったらできるかな」「よし、挑戦してみよう！」という積極的な姿が見られる反面、「できないかもしれない」「あきらめよう」と消極的になり、運動を心から楽しめていない姿も見られることである。また、こういった姿は2～6年の子どもたちを対象としたアンケートの結果からもうかがえた。特にこのような姿や結果は、高学年になるにつれて割合が高くなっていくこともわかってきた。

なぜ消極的になってしまうのか。研究グループでは、普段の子どもたちの学習の様子から、子どもたちが運動に対して自信をもって取り組むことができずにいるのは、たくさんの「できた」経験や「できた喜び」といった成功体験からなる有能感の高まりをあまり感じられていないことが要因と考え、「できた喜び」をたくさん味わえる学びを提供することができれば、もっと自信をもち、積極的に学習へと取り組めるのではないかと仮説を立て、次のことを大切にして教材づくりを行ってきた。

- ① 「できた」に向かうために何をすればよいのかが「わかる」
- ② 「できた」ことを実感できるための手だてや場の工夫（目安・目印・グループ・ペア）
- ③ 「できた喜び」を感じられる機会や場の保証（達成感や友とのかかわり）

これらのことを踏まえた授業を行うことにより、少しずつではあるが、子どもたちの学習の様子が確実に変化してきている。

その変化の一つは、課題に積極的に取り組むようになったことである。そうなった要因の一つは、子どもたちの課題に応じて段階的に知識（「わかる」）や技能（「できる」）を深めたり高めたりしていったことが考えられる。このような学習により子どもたちは、目の前にある一つ一つの小さな課題へも、見通しをもって取り組むことができるようになったと考える。またそこから、小さいながらも、その一つ一つからたくさんの「小さなできた」といった達成感からなる「できた喜び」を感じる事ができ、それらを積み重ねていったことが、自信をもつことへとつながったのであろうと考える。

もう一つの変化は、友とのかかわり合いの中から、多くの気づきや学びの深まりが生まれてきたことである。かかわりが生まれやすいルールを考えたり、場を設定したりすること、一人一人が解決へ向けて見通しをもてるように指導内容をより明確にすること、といった教材づくりや指導の工夫が、友と共に学ぶことのよさを感じながら、夢中になって取り組むことを促したのである。

しかし、ただ指導内容を段階的にし、「小さなできた」といった成功体験を保証していけば

よいものではないはずである。「できた」ことを、次の活動や動きへの見通しをもつことにつなげられたり、動きを発展させることに活かしていけたりすることのできる学びでなければ、自信をもち、積極的に、また夢中になって取り組んでいける姿へとつながらないであろう。子どもたちが得た一時間の学びやその単元における「できた」経験を、次に活かすことや、活かそうとすることができるように、教師が系統性を踏まえて指導内容を考え、それを段階的に学ばせることができるための教材づくりをしていくことが大切であると考えた。

そこで、系統性を踏まえた指導内容を、スモールステップを踏み、「小さなできた」を積み上げながら段階的に学ぶことで、一人一人が「できた喜び」を感じ、友や教材とかかわり合いながら夢中になって取り組む体育学習へとつながることを願い、本主題を設定した。

### 3 研究の仮説

#### <このような子どもたちが>

- 学年や男女に関係なく教科として「体育」が好きで、運動に対し意欲的・積極的に取り組める子どもたち
- 初めて体験する動きや発展的な動きになると、動きを見通せなかったり、ぎこちない動きになってしまったりすることで、「できない」と感じている子どもたち
- 「できない」と感じることで学習意欲を低下させてしまったり、あきらめてしまったりするなど、積極的になれないこともある子どもたち
- わかったりできたりすると意欲的になり、夢中に取り組めることが多い子どもたち
- 友だちに評価されることで、より「できた」ことを実感する子どもたち

#### <このような手だてによって>

- ◇ 「わかって→できる」
  - ・各領域や各単元において核となる指導内容を抽出し、段階的・系統的に「小さなできた」を積み重ね、「できた」ことで楽しく夢中になって学ぶことができる教材
  - ・子どもたちのつまずきや願いから1時間の学習課題を設定すると共に、課題解決のための方法や成果を確認しやすい、指導と評価の一体化がなされた授業
- ◇ 「かかわり合う」
  - ・他者評価のしやすい教材や場の設定
  - ・「かかわり合いたい」と思えるような、かかわりが生まれやすいルールや場の設定
  - ・「かかわり合う」ことの内容（学習課題や解決のための方法や個々の役割等）が明確
  - ・「かかわり合えた」喜びを共有できる場の保証（グループ及び全体でのふりかえり等）

#### <このようになるだろう>

- ◇ **一人一人ができた喜びを感じ、かかわり合いながら夢中になって取り組む体育学習**
- ◇ 「小さなできた」を積み重ね、技能の高まりを感じることで、運動のもつ特性を存分に味わい、楽しさや喜びを感じ、夢中になって運動する子どもたち
- ◇ 「わかる」ことで「できた」へ向かうための方法がわかり、見通しや意欲をもって学習する子どもたち
- ◇ 「こうやればよさそうだな」と今までの運動経験や・学習経験を生かせることで、見通しや自信をもって学習に取り組める子どもたち
- ◇ 友だちとかかわりわり合うことに楽しさや喜びを感じ、共に高め合える子どもたち

#### 4 研究の重点

- 1 「小さなできた」を積み重ね、「できた喜び」をたくさん感じられる段階的な学び、「できた」経験を生かす系統的な学びを踏まえた教材づくりの工夫
- 2 共に高め合い、共に「できた喜び」を味わえることのできる、かかわり合いが生まれやすい場の保証と指導の工夫

#### 5 研究内容と実践事例

- (1) 「小さなできた」を積み重ね「できた喜び」をたくさん感じられる段階的な学びを踏まえた教材づくりの工夫

子どもたちがたくさん「できた喜び」を味わいながら夢中になって学習へと取り組める姿を願った本研究グループは、「できる」ためにはどのようなことを大切にすればよいのか、また、そのような学びのための教材づくりの在り方とはどのようなものかを、実践を通して考えていくことにした。

研究を進めていくうちに分かってきたことは、「わかる」ことの大切さである。「こうするといいのだな」「ああなるといいのだな」ということが具体的にわかることは、成功をイメージできたり、活動の見通しをもてたり、今の自分を評価できたりするということである。これによって意欲がわくことで、「できる」へ向かいもっと積極的になれるのだとも考えた。もちろん、運動に苦手意識をもっている子にとっては、「わかる」ことがすぐに「できる」ことへとつなげることが難しい場合もある。

そこで本校研究グループでは、5年生の器械運動「足ジャン 手ジャン かんたんジャン！（跳び箱：大きな開脚跳び→かかえこみ跳び）」の実践授業を通して、「わかって→できる」ための多面的な支援となる要素や手だてを明確にした。（ゴシックは、同単元での実践）

##### <視覚的>

- ・ 掲示物（姿勢やフォームが一目で分かるもの・子どもたちが発見した技能ポイントなどを記したもの：着手の位置や着手時の姿勢がイラストによって示された模造紙）
- ・ 示範（友や教師が実際にやって見せる）
- ・ 目安、目印（どのくらいできているのか、といった自己評価等をしやすくする：着手位置や跳び乗った際足の位置を確認できるための跳び箱上のライン）
- ・ 映像（技能ポイント等の確認、友や自分たちの姿から確認したり自己評価したりする）

##### <感覚的・体感的>

- ・ 補助を受けての体験（友や教師から、体を支えてもらうなどして感覚を得る）
- ・ ゆっくりとした動作（その動きをゆっくりと行うことで動きのポイント等を確認する）
- ・ 単一・簡易動作（複合された動きの中から必要な動きのみを抽出したものや、それに似た簡単な動きを行うことでイメージをもつ：足ジャンプ・手ジャンプ）
- ・ 視覚や聴覚から入力されるタイミング（声や音によってタイミングを図れるようにしたアドバイスのなもの）
- ・ 段階的な技能習得 「小さなできた」を積み重ねることが「できた喜び」となるように（例：「跳び箱・かかえ込み跳び」カエルの足打ちの回数、足閉じウサギジャンプの距離、足ジャンプから手ジャンプで台上跳び乗り→手ジャンプ位置よりも前に足を置く）

- ・ 既習技能の応用（「小さなできた」の応用や「できた」ことの発展：力強い手ジャンプ・足ジャンプ）

<理論的>

- ・ 教科書や参考書籍等の解説

《事例1》「小さなできた」を積み重ね「できた喜び」をたくさん味わえたことで自信をもち、夢中になってかかえ込み跳びへと取り組んだH子

～「足ジャン 手ジャン かんたんジャン！」（5年生 跳び箱：大きな開脚跳び→かかえ込み跳び）～

第1時、開脚跳びに挑戦してみたH子は、3段で「怖い」と言い始め、何回挑戦しても跳び箱にまたがってしまうようになってしまった。教師や友の励ましにも「わたし、昔から跳び箱苦手だから」と言ったり、「別に跳べなくてもいい」と言ったりするなど、意欲をもてずにいた。また、クラスの子もたちの実態としてもH子のような姿が多く見られた。

第2時では、「足ジャンプ」をした後に上体を跳び箱と水平にし、跳び箱の奥に手を着いてから「手ジャンプ」をするといった開脚跳びの『成功の素』を確認した後、毎時間の導入に設定されている下位教材、「カエルの足打ち」



教師に見守られながらかかえ込み跳びに挑戦するH子

と「うさぎジャンプ」を行った。距離や回数といったそれぞれの自己記録を目指しながら楽しんで取り組み、両腕にしっかりと体をあずけて手ジャンプをすることや、着いた手よりも前に足を出すといったことを体感しながら、跳び越す感覚を徐々に醸成していくことで、第1時では跳べなかった4段の開脚跳びをクリアした。友だちからも「Hちゃん、すごい！」と声をかけられ喜んだ。第3時では、「もっと手ジャンプと足ジャンプを強くして跳ぶ」ことを個のめあてとし、徐々に踏み切りの力を強め、跳び箱に貼られたテープを基に着手の位置を少しずつ跳び箱の奥へともっていくなど、試したり確かめたりしながら練習し、自己最高記録の6段を跳んだ。

第4時から、H子にとって人生初めてのかかえ込み跳びに挑戦した。まずは跳び箱を横にした状態で跳べるようにと、横の長さがテープによって示されている縦の跳び箱で、テープより奥に足を着くことをめあてとし、友だちと足の位置を確認し合ったりアドバイスをし合ったりしながら跳び箱に跳び乗る練習をした。この時間の振り返りでは「黒板に貼ってあった絵のようにやってみたけど、手より足が前にいかなかったので、今度は、最初の時のうさぎジャンプの時にしっかり練習したい」と学習カードに記した。

この单元の中では、かかえ込み跳びを成功させることができなかったH子ではあったが、手ジャンプの後に両足を揃えて跳び箱の上に乗ることまではできるようになり、单元の終盤には、「わたし、跳び箱が大好き！参観日は跳び箱がいいな」と笑顔で担任に話した。

<考察>

H子は、自分の課題を一つずつ解決していくと共に、跳び箱に対する自信を大きくし、跳べる喜びを感じながら夢中になって取り組んでいった。この姿が現れた要因として

- ① 開脚跳びの指導内容を「足ジャンプ」や「手ジャンプ」として複合的な動作を単一的に示し、それを「成功の素」として掲示し視覚的にわかりやすく示したこと
- ② 手を着く位置や足を乗せる位置などを示した跳び箱上の2本のテープが目安となり、「こ

ここに手を着けばいいのだな」という見通しをもつことができたり、「ここまでできたぞ」という達成の度合いを評価できたりしたこと

- ③ テープからの距離によって「先ほどよりできた」といった自己評価をすることにより、自己の高まりを感じさせることができたこと

といった「わかって→できる」ための手だてが挙げられる。これらにより、一つ一つは小さいかもしれないが、たくさんの「できた」を感じることができたと思われる。また、そのたくさんの「できた喜び」がH子の自信や更なる意欲を生み、開脚跳び6段成功へと導いたのではないか。この「小さなできた」の積み重ねは、喜びといった情緒面だけではなく、段階的に技能を高めていくといった技能面においても大きな支えとなった。

このように、「わかって→できる」ことを柱とし、「小さなできた」をたくさん味わいながら段階的に学ぶための教材づくりの工夫をしたことは、「できた喜び」をたくさん感じながら夢中になって跳び箱運動の楽しさを味わう姿へとつながった。

## (2) 「できた」経験を生かした系統的な学びを踏まえた教材づくりの工夫と段階的な指導

主題設定の理由でも述べたが、ただ段階的に学習し、成功体験を重ねていけばよいのではなく、その単元や領域を系統的に学ぶための核となる指導内容をしっかりと吟味した上で設定し、それを基に教材づくりをすることが大切ではないかと考え、4年生のゲーム(ゴール型ゲーム)において攻撃面の学習を中心とした教材づくりを行い、実践授業を行った。

まず我々は、ゴール型の攻撃を戦術面に特化し、それを系統的に学習させたいと考えた。そこで、この領域における核となる指導内容として「ボールを持たない時の動き」を抽出した。発達段階を踏まえ、3対2のアウトナンバー学習を単元の指導内容に据えた。また、5・6年で学習する「バスケットを簡易化したボール運動」、中学で学習する「アウトナンバーバスケット(3 on 2や4 on 3: ハーフ及びオールコート)へと系統的につながるよう、4年時で大事にしたいことを以下のように考えて教材づくりの工夫を行った。

### ① シュートチャンスがわかる

360度のコートをもつセストボールを基本ゲームとすることで、攻撃・守備・ゴールといった三者の位置関係からなる状況判断をしやすくした。

### ② スペースがわかり、そこへ移動できる

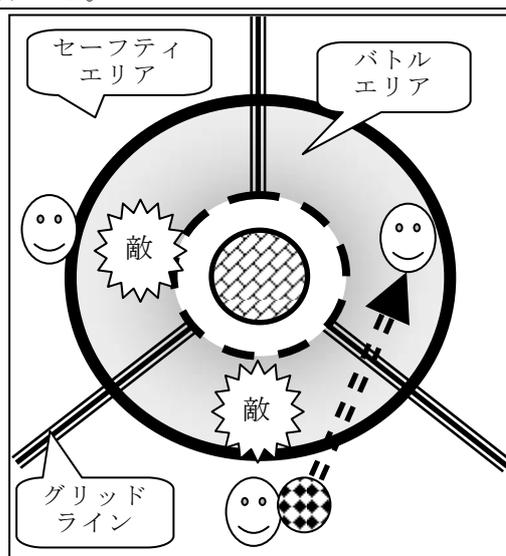
ゴールを中心にコートをもつセストボールを基本ゲームとすることで、攻撃側がボールに集まり過ぎることなく、自分の周りがあるスペースを有効利用して攻撃することをしやすくした。

### ③ フリーの味方へパスを出せる

セーフティエリアを設けることで、落ち着いてボールを保持したり、ノーマークのプレイヤーにパスしたりすることができるようにした。

### ④ ②、③の学習が中心となるように

ドリブルは一切禁止とし、パスのみで攻撃をすることにした。



※ ボールはミニソフトバレーボール(高学年用)を使用

また、これらを段階的に学ぶことができるようにと授業展開を予測し、子どもたちの実態に合わせ、以下のように課題を設定していった。

### ＜子どもたちの課題に合わせて行った教師の系統的な学習のための支援＞

- ① スペースを見つけよう！
  - ② スペースへ動いてパスをもらおう！
  - ③ スペースへ素早く動いてパスをもらおう！
  - ④ 敵に気付かれないようにスペースへ動いてパスをもらおう！
  - ⑤ ゴールに近いスペースを見つけて動いてパスをもらおう！
  - ⑥ ゴールに近いところで攻撃できない時には、外の空いている場所へ戻そう！
  - ⑦ 外側や内側にできる、空いている場所に動いてパスをもらってシュートしよう！
- ※ 子どもたちには「スペース」を「空いている場所」と表現した

### 《事例2》

工夫された場で実際に動いたり、課題や解決方法を全体で確認したりしながら、「ボールを持たない動き」を友とかかわり合いながら系統的に学んだことで、動きの高まりやチームの成長といった「できた喜び」を友と共に実感しながら、夢中になってプレーしていったレッドファイヤーズの子どもたち。

#### ～4年生「ノーマークセスト」(ゴール型ゲーム)～

フリースペースでボールをもらい、ノーマークになってシュートをすることの重要性は理解しているものの、そのスペースはどこにあるのか、また、そのスペースでボールをもらうにはどうしたらいいのかと、少々戸惑いを見せながら学習をスタートさせていったレッドファイヤーズの子どもたち。

第2時の課題は、「空いている場所を見つけて動いてみよう」。自分のグリッドのほぼ中央からあまり動かなかったM子。そのことから攻撃が偏り、チームメイトはマークをされた状態でシュートを放ちがちであったが、教師と実際のグリッド上で空いている場所を確認したことで、動きはゆっくりであったが、グリッド内の空いている場所を見つけ、そこへと動いていけるようになっていった。すると、パスが回るようになり、ノーマークのシュートも増えていった。しかし、移動がゆっくりであったため、徐々に守備にも読まれ始め、パスが回らなくなると共に、ノーマークでのシュートも減り、試合に負けてしまった。「もっと速く動かなければ、ボールをもらえない」、そのような課題は、レッドファイヤーズだけではなく、他のグループにもあることが、全体でのふり返りの場で確認できた。そこで、解決方法を考える場をもつと、子どもたちの中から「速く動かないと、敵に動く場所がばれてしまう」という意見が出たことで、第3時の課題は、「見つけたスペースに、素早く動いてみよう」とした。M子の動きは、素早くとは言えないものであったが、確実に以前よりも速く移動していた。また、アドバイスとして「相手に気付かれないように動くとよい」ということも伝えていったことで、フリーになってボールを受けることもできるようになっていった。チームの仲間もパスをしやすい場所へ素早く動いてくれたことで、M子からも少しずつパスが出るようになっていった。



内側のノーマークの味方へパスだ！

M子を始め、段々と動きがよくなっていったレッドファイヤーズであったが、試合では1回も勝てずにいた。

単元の中盤から、コート全体を自由に使う中でスペースを有効利用しながら攻撃できるようにと、グリッドが撤廃され、コートのどこへでも動いてボールをもらうことが許された。しかし、コートが大きくなることで、スペースの認識が思うようにできず、動きが止まり、パスも止まってしまった。また、内側のスペースに気付くことができず、外側からのシュートが増え、得点が入らなくなってしまった。

第7時、全体で課題を確認する場において、ボードで平面的にボール・人・スペースの位置を確認した後、次はレッドファイヤーズのチームが手本となり、コート上で確認し合った。これにより、各チームとも「外側や内側に行ける、空いている場所に動いてパスをもらってシュートしよう」という課題意識や攻撃における自分の役割が明確となり、コート上にできるフリースペースを見つけ、そこへと素早く動いてボールをもらってパスをつなげ、攻撃していった。

試合では、レッドファイヤーズの子どもたちもフリースペースへと動いて攻撃をしていたが、シュートするが位置が若干遠かったせいか、前半は14対3と大きく差を開けられていた。そこで、作戦タイムでは、外側でボールをもらった際にゴール付近にできるスペースをもう一度、教師と共に確認し、後半へと挑んだ。レッドファイヤーズの子どもたちは、外側の空いている場所に動いてボールをもらい、内側の空いている場所にいる仲間にパスを送り得点へと結び付けていった。M子も懸命に動き、外側を中心にボールをもらい、内側へのパスを狙い、警戒されれば外側からシュートを放った。残念ながら結果は14対23で負け、初勝利とはならなかったが、後半だけでいえば11対9という大健闘に、M子のチームメイトであるM男は試合終了後に「やったー！」と大声で叫び、試合には負けてしまったものの、チームの頑張りによる作戦の成功を大きく喜んだ。また、終末のまとめの時間には、「14点も取ったんだよ！」と兄弟チームへと誇らしげに報告する姿があった。

#### <考察>

単元前半の攻撃では、自分の近くにあるスペースを無理なく見つけ、そこへと素早く動いてボールをもらえるようになっていった。また、それと同時にボールを持っている時のシュート、パスといった判断もしやすそうであったことから、グリッドを設けたことやゴールを中心に360度に展開して攻撃するといったセストボールを簡易化したことによる教材づくりの工夫が有効に働いていたと考えられる。

また、例え試合に負けてしまっても喜んだレッドファイヤーズの姿からからも、ゴール型領域を系統的に学ぶための核となる指導内容を「ボールを持たない動き」とし、1時間の課題を子どもたちと共にふりかえり、そこから新たな課題と解決の見通しをもっていったこと、即ち、1時間ごとに指導内容を評価し、それを次時の課題や指導へと生かしていくといった指導と評価の一体化を心がけた授業づくりをしてきたことは、「つける力」を明確にすると共に、一人一人が1時間における達成感→「小さなできた」を系統的に積み重ねながら学ぶことへとつながった。更には、運動の特性や運動のもつ魅力を存分に味わい、夢中になって取り組む姿へとつなげることができたと考えられる。

しかし、それだけではなかった。我々は、この事例からとても大切なことに気付かされた。それは、段階的な学びについてである。

単元の前半は、教師が予想した学習展開となり、「ボールを持たないときの動き」を段階的に高めていくことができたが、単元の後半に、グリッドによる移動制限を撤廃したことで多少の混乱が生じ、動きやパスが止まってしまった。子どもたちは、新たに直面した課題に

対して戸惑いを見せてはいたが、教師と共にコートを広く使った時にできる内側と外側のスペースを確認したことで、単元前半に段階的に積み上げた「小さなできた」を課題の解決へと生かしていくことができ、新たな「できた喜び」を感じていた。

系統的に「ボールを持たない時の動き」を学ぶための支援の予想を、段階的なビジョンもって教師が指導できたことは、子どもたちと共に課題や課題解決の方法を見出していく時の大きな支えとなった。

段階的な学びとは、教師側が与えたものを子どもたちがただ積み上げていくものではなく、領域や単元において系統性をもった指導内容を段階的に積み上げていけるよう指導していくとともに、子どもたちの実態からなる課題を教師がしっかりと踏まえ、時には積み上げたものを振り返ったり、積み上げ直したりしていくものでもあることに気付かされた。

### (3) かかわり合いながら夢中になって取り組み、共に「できた喜び」を共感し合う場が保証された教材づくりの工夫

子どもたちが、「できた」ことを実感する時は、自らが努力したり、友だちと協力したりして「できた」その時だけではない。「できた」ことを友だちや教師から認められた時や、自分やグループの活動を振り返った時にも「できた喜び」を強く実感している姿がある。

このことから、「かかわり」の機会が生まれやすい学習形態や「評価」の場を充実させることが、「できた」ことをより実感しながら夢中になって取り組む姿へとつながると考えた。

そこで、個人の技能向上が主となる陸上運動でも友とかかわりながら学習できるよう、5年生のハードル走において教材づくりを行い、実践授業を行った。

以下は、「かかわり」を生みやすくするための教材づくりの工夫

① お互いに協力して、ハードルの跳び方を高め合ったことのよさが感じられるように、チーム対抗タイムトライアルを単元後半に位置付けた。

<方法> 個人の40mフラット走と40mハードル走とのタイム差を得点化したものを合計し、グループの平均を算出したものを競い合う。

② グループやペアを編成し、お互いに見合ったり、アドバイスをし合ったりしながら学習を進めるようにした。

③ 「たしかめタイム」や「振り返り（結果発表、今日のお立ち台）」の場を設けることにより、かかわれた喜びを共有することができるようにした。

④ チーム内で、リーダー、ハードル器具の準備やタイムの記録、得点集計など、役割を分担することすることで協力し合い、チームとしての一体感をもたせた。

また、この領域を系統的に学習するための核となる指導内容を「力強い着地足（インターバルの一步目）」とした。また、具体的なアドバイスをし合うことを通してかかわり合うことができるよう、以下のように、学習する上で大切にしたいポイントや個々のつまずきを課題把握の場面や終末の振り返りなどで紹介して示し、共通理解を図った。

< 1の足を大切に、リズムカルにハードル走をしよう！ >

※ 着地足を「1」の足と考えて

① 「1・2・3・ジャンプ！」のリズムで走れているかな？

- ② 「1の足」を素早く力強くして、インターバルのスピードを上げよう！
- ③ ジャンプの位置を遠くして、「1の足」をより2歩目以降へとつなげよう！
- ④ リード足が真っ直ぐに出ているかな？
- ⑤ 「1」の足を着いた時に、ふらふらしていないかな？

### 《事例3》

かかわることを必然とした教材の工夫や、課題や課題を解決していく方法がわることで、チームやペアと共にかかわり合いながら、夢中になって取り組めたH子と仲間たち

～5年生：陸上運動「リズムでとびこせ！ ソフトハードル」～

単元に入る前の試走では、ハードルに近づく度に減速し、ゆっくりとまたぐようにしてハードルを跳び越していたH子。ハードルの材質が金属のフレームから塩ビのフレームに変わったことや、自分に合ったハードルの高さやインターバルを見つけたこともあってか、ハードルの手前でスピードを落とすことなく、少しずつリズムカルに跳び越すことができるようになっていった。また、それと共に、徐々にタイムを縮めていくことができていった。

前時、うまくスピードに乗ることができず、3～4台間で歩数が合わなくなってしまっていたH子だが、ペアのJ男から「ハードルを低く跳び越そう」とアドバイスしてもらったことで、自己記録を更新することができた。

第7時、全体で集まったあと、教師は今までの学習を振り返り、子どもたちの気付きや教師の助言によって生まれてきたいくつかの「力強く一歩目を踏み出すためのポイント」を確認した。その後の練習でH子は、その中から「高くとばない」と自分のめあてを設定した。

1回目…歩数が合わない。J男は「ちょっと小股になっている」とアドバイスをした。

2回目…前時と同様に3～4台で歩数が乱れる。J男は「最後のところでこうなっていたよ」と小股に歩数合わせをしていた様子を真似て見せた。

3回目…歩数が合い、徐々にスピードに乗ってきたが、J男からは「こうなってるよ」と跳び越す際にリード足が曲がり、上に跳んでしまっていることを教えてもらった。

授業中盤に設定されたグループ全体による「確かめタイム」では、J男から「足が曲がっているよ。詰まる感じはない？」と聞かれる。H子は「ないよ」と答えたところ、J男は、「（詰まる感じが）なくて曲がるんだね。（ハードルのバーを）開いてみたら」と、H子の膝が曲がってしまう理由をハードルを低く跳び越そうとする際にバーに足が当たってしまうことによる恐怖心だと判断してアドバイスをした。H子は「うん」と答え、後半の班練習へと入っていった。

J男を始めとする3人のチームメイトたちも協力し、H子がバーを気にすることなく、低く跳び越すための練習をすることができるようにと、4台のハードル全てのバーを開いていった。

1回目、2回目共に、1台目のハードルの前で小刻みに足を動かして足を合わせるようにして跳び越した。走り終えたH子を班の全員で囲み、「こうなっていたよ」と地面に絵を描きながら1台目の前の足の動きを教えた。

いよいよタイムトライアル（トライアルなので、バーは閉じている）。練習時と同様に、1台目の前で足を合わせる動きはあったものの、最後のハードルまで3歩のリズムを崩すことなく走り切った。アドバイスを送り続けたJ男を始めとするチームメイトたちも、H子の



着地足が助走の一歩目！ 1・ジャンプ!!

走りを喜んだ。残念ながら、タイムは自己ベストに及ばなかったH子であったが、学習カードでの振り返りでは、「目当て達成→◎」「チーム協力→◎」と記入し、チームで協力し合えたことや、自分の課題への取り組みに満足する姿があった。

#### <考察>

個人で技能を高める展開が多い陸上単元を、40メートル走と40メートルハードル走とのタイム差を得点化し、グループ対抗で競い合うというものにしたことや、ペアを組んで学習を進めていったことは、友とのかかわり合いを生みやすくし、走りを見合ったり、アドバイスをし合ったり等、かかわり合いながら夢中になってお互いの課題を解決していこうとする姿へとつながった。

また、リズムカルなハードリングをするための中心技能を「力強い着地足」とし、そのために大切になるポイントを、全体でのふり返りの場や、課題把握の場によって確認しながら示してきたことは、課題解決や「小さなできた」につながる情報を全員で共有することへとつながった。またそれは、お互いに相手の様子を伝え合ったり、用具や場の選択についてのアドバイスをし合ったりするといった姿を多く生み、自己の課題に合った用具や場を選び、それをペアやチームで見合いながら練習して解決していくといったかかわり合いの学びを、より有効なものとした。

## 6 研究の成果と課題

#### <成果>

- 「小さなできた」を積み重ね段階的に学ぶことを踏まえた教材づくりにより、技能面・意欲面共に大きな高まりを感じさせることができた。
- 「小さなできた」とは、ただ教師が一方的に与えて技能や知識を積み重ねていくものではなく、子どもたちの学習がより系統的な学びとなるよう、子どもたちの実態や指導内容を教師が踏まえ、段階的なビジョンをもって学習を進めていくことであると捉え直した。
- 各領域や各単元において系統的に学ぶ上で核となる学習内容を抽出し、それを踏まえて教材づくりをすることは、経験を生かしたりつなげたりしながら見通しや自信をもって学ぶ姿へとつながった。
- 他者評価のしやすい学習内容・課題解決方法の共有・かかわりの場の保証といった教材や授業づくりの工夫や指導をするところは、かかわり合う機会を多く生み、友と共に夢中になって取り組む姿を生んだ。

#### <課題>

- 低学年での授業において「できた喜び」をより実感させることができるための「小さなできた」の在り方。(距離や時間といった視覚的にもわかる技能の向上を保証するための、調子よくリズムカルにといった感覚的にわかる技能の向上を踏まえた教材づくり)
- 子どもの発達段階や領域の特性及び、中学校の学習へと系統的につながることを踏まえた指導内容の抽出や指導。また、それに伴う小・中学校による連携。

# 第 4 分 科 会

## 研究主題

仲間とかかわりあいながら、運動の楽しさや高まりを実感できる子どもの育成

～ 「できた」「わかった」が実感できる授業づくり ～

長野市立<sup>みわ</sup>三輪小学校

## 日 程

9:00 9:45 10:30 11:00 11:45 13:00 13:15 14:15 14:45 15:00

受 付	公 開 授 業 ①	移 動 ・ 休 憩	公 開 授 業 ②	昼 食	開 会 行 事	研 究 協 議	研 究 発 表	指 導 助 言	閉 会 行 事
--------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	--------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------

## 公開授業内容

第6学年 「体づくり運動」

体育館

第3学年 保健「毎日の生活と健康」

第2理科室

## 学校所在地



## 交通機関

- 最寄駅  
長野電鉄「本郷駅」下車 徒歩3分
- 経路  
長野駅  
↓ 所要時間6分  
長野電鉄「本郷駅」下車  
徒歩3分

# 学 校 概 要

学校名	長野市立三輪小学校		
校長名	三ツ木辰巳		
学級数	18学級	児童数	451名
所在地	〒380-0803 長野市三輪8丁目3-2		
連絡先	TEL 026-234-1251 FAX 026-234-1252		

## 【学校紹介】



長野市立三輪小学校は長野電鉄本郷駅のすぐ西にあり、137年の長い歴史と伝統を持つ学校です。

学校の東隣には、古く「延喜式」(10世紀初頭)にも名前が見られる美和神社があります。校内からは神社の鬱蒼とした木々を見ることができます。

また本校は、36年ほど前から自主公開授業を行うなど、独自の伝統を持っています。

### 《基本方針》

学 校 目 標 心に感ずる あたまを働かせ からだを動かし	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 「からだを動かし」 ○体感を重ねることを通して、自らの力で心身を鍛える精神を育む</li> <li>2 「あたまを働かせ」 ○自分の問題として進んで学び、納得を求めて深く考える力を育む</li> <li>3 「心に感ずる」 ○生かされている自分に気づき、強く生きようとする自分を育む</li> </ol> <p>◇この具現のための様々な取り組みの中で、自分の育ちを振り返り、それらが自分の日常生活や将来に生きて働く大切なものであることに気づき、更に強く求め続ける豊かで確かな心を育んでいきたい。</p>
--	--

### 学校運営の方針

- 学校は子どもたちにとって ころゆく生活の場でありたい -
- ◇一人ひとりの子どもたちが自らをかけがえのない存在として大切に、精一杯自分を輝かせる場でありたい。そのために「ころゆく」の具体を次のように考える。
  - (1) 一人ひとりが認められ安心して生活できる。
  - (2) 自分なりに目的を持ち、前向きに張りのある生活ができる。
  - (3) 仲間の個性を尊重し、互いに信頼し合える。

### 長野市教育大綱

- 敬愛の心
- 長敬の念  
他によって  
生かされていると思う心
  - 惜愛の念  
他を思いやって  
生きようとする心
- 深く豊かな人間性の実現
- ・深い思いやり
  - ・清らかな情操
  - ・基礎的な学力
  - ・強じんな意志・体力

### 願い実現のための3つの重点目標

#### 《具体方針》

- |   |   |  |
|---|---|--|
| <b>1 開かれた学校づくり</b><br>◇児童・保護者(地域)・教師にとって互いに理解し合えるための取組を進める。<br>◇外部人材・組織等、地域の財を活用し、教育力向上を図る。 | <b>2 豊かで確かな学びの場づくり</b><br>◇メタ認知力の向上を軸に、学ぶ魅力や自己の成長を感じ取れるための授業改善に取り組む。<br>◇保護者との連携を深め、家庭学習(生活)の充実を図る。 | <b>3 ひびき合う心を育む場づくり</b><br>◇「もの・ひと・こと」と関わる具体を通して自分や社会を見つめる活動の充実を図る。<br>◇挨拶や所作、言葉づかい等の指導を通して、人を大切にする心を育てる。 |
|---|---|--|

## 1 研究主題

仲間とかかわりあいながら、運動の楽しさや高まりを実感できる子どもの育成  
～「できた」「わかった」が実感できる授業づくり～

## 2 主題設定の理由

本校の子どもたちは、運動好きの子が多く、休み時間には校庭でサッカーをしたり、体育館では、バスケットボールやドッジボールをしたりして楽しんでいる様子が見られる。また、体育の時間を楽しみにしている子が多く、体を思い切り動かす姿が見られる。放課後には、野球、サッカー、ドッジボール、スイミング等の社会体育に参加している子がいる。このように運動に積極的に取り組む子どもがいる一方で、校庭や体育館で運動をしている子は限られてきており、特に高学年女子の姿を見ることは少ない。また、行われる運動は、ボール運動に偏りがある。社会的に課題となっている運動を日常的に行う子と行わない子がいるという二極化が本校でも見られている。

体育や保健の授業での子どもたちの姿から、課題として次のような点があげられてきた。

- ・新しい運動に興味を示す子どもが多いが、自ら進んで新たな工夫をしたり、ルールづくりをしたりすることが苦手である。
- ・運動ができないことで、活動をあきらめがちになる子がいる。
- ・自分の健康について関心の低い子がいる。また、学習してきたことを実際の生活にいかすことが少ない。
- ・体力面では、今年度実施した4年生以上のスポーツテストの結果より、全国比では、全般的に低い値が見られる。特に、「筋力」「柔軟性」「敏捷性」を示す値が低い。

このような課題の原因を考えると、子どもたちを取り巻く環境の変化や体験不足によることも大きいと考えられるが、体育の授業を振り返ってみると、学年に応じた運動経験が不十分であったり、子どもたちの興味と指導のねらいが合致していなかったりしたことが要因にあると考えられる。

本校では、学校目標「からだを動かし あたまを働かせ 心に感ずる」のもと、全校研究テーマを「自己をみつめながら学びを深め合っていく子ども」とし、研究を進めている。体育の授業の中では、子どもたち自身が運動のもっている楽しさや魅力を感じながら、「運動ができた」「やり方がわかった」「前より伸びた」「もっとこうしてみたい」ということを実感していくことが、自己を見つめながら、学びを深めていくことと考えている。また、実感を得るためには、一緒に取り組む仲間のかかわりが必要不可欠であり、お互いに学びを深めあっていくかかわりをもたせたいと考える。

さらに、校舎改築による校庭縮小やそれに伴うプレハブ校舎での生活によって、運動のできる環境が少なくなってきたり、子どもたちの日常的な運動への取り組みに、少なからず影響していると考えられる。すべての子どもたちが、運動に意欲的に取り組むことができる環境整備も行っていきたいと考える。

以上のことから、研究主題を「仲間とかかわりあいながら、運動の楽しさや高まりを実感できる子どもの育成」とし、特に「体づくり運動」「保健」の学習を中心に研究を進めていくこととした。

### 3 研究仮説

#### 【このような子どもたちに】

- 「できると楽しい。」「自分の伸びを感じると楽しい」と感じている子どもたち
- 個人差は大きいですが、これまでのゲームの中だけでなく、様々な運動の中で仲間とともに  
行うことの楽しさを感じ始めてきた子どもたち
- 運動が好きであるが、取り組み方に個人差が大きかったり、運動に対して苦手意識が強  
かったりする子どもたち
- 今ある力でできると満足してしまい、「楽しさ」の中身がただ「おもしろかった」「楽し  
かった」で終わってしまう子どもたち
- 既存の運動、スポーツにこだわり、新しい工夫やルールづくりが苦手な子どもたち
- 「自分の体」や「生活」への関心はあるが、どのようにして高めていったり、改善して  
いったりするとよいか、よくわからない子どもたち
- 「わかった」ことが、日常生活には十分にいかしきれていない子どもたち



#### 【このような手だてをすれば】

##### 「できた」「わかった」実感がともなう教材づくり

- 子どもたちが、「楽しく」取り組める教材
- 自分の「伸び」がわかる教材（自己評価がしやすい教材）
- 日常生活につながる可能性のある教材（大がかりな物でなく、より日常的な物を使  
ってできる教材）
- つける力が明確になっている教材
- 保健の学習等で、養護教諭による科学的な知識をもとに、見えない物が見えるようにな  
ったり、身近でないものが身近になったりするような教材づくり
- 学習カードの工夫（自己評価が簡単に、なおかつ的確にできる工夫）
- 効果的な資料提示

##### 仲間とのかかわりあいが出まる指導

- 内容に応じて、ペアやグループで行うことを考えながら、そのグルーピングについては  
十分に目的にそって行う。
- 運動技能が高まっていったり、運動をする意欲が高まったり、持続したりするような必  
要感のあるかかわり合いを生み出していく。また、ペアでやることでわかったり、グル  
ープで協力してできたりする教材を考えていく。
- かかわり合いのできる場や時間を保証する。
- お互いの動きの何を見るか、どう見るかを明確にし、それを共有化していく場を設ける。

##### 日常生活につながる学習展開の工夫

- これからやる運動が自分のこととして意識できるようなオリエンテーションを大事にす  
る。また、学級活動や総合的な学習の時間等体育以外の学習とのかかわりを深めていく。
- 「運動と体力の関係」を意識づけるために、終末の学習を大切に考えていく。
- 全校運動の充実（週1回の全校運動の中で、日常生活の中でできる運動を紹介していく）
- 休み時間等教科以外の時間の子どもたちの過ごし方について考えていく。（体育館に跳び  
箱、マット等を設置して休み時間、授業に活用できる運動週間）
- 学校内外の環境整備を行う。
- 養護教諭との協力体制を整える。



### 【こうなるだろう】

仲間とかかわりあいながら、運動の楽しみや高まりを実感することができるであろう。

- 「できると楽しい」「自分の伸びを感じると楽しい」とさらに感じ、運動が好きになり、運動に夢中になって取り組むことができるであろう。
- 運動の魅力や特性にさらに深くふれることができるであろう。
- 体育における仲間とのかかわりが積極的になり、豊かになっていくであろう。
- 自分や仲間の体（健康）に関心をもって、進んで健康づくりにかかわったり、実際の生活の中に取り入れたりしていくことができるようになるであろう。

## 4 研究の重点

- (1) 4-4-4のまとまりを意識した6年間での指導内容の具体化
- (2) 「楽しく」「できた」「わかった」実感が伴う教材づくり
- (3) 仲間との豊かなかかわりがうまれる学習指導過程の工夫
- (4) 日常生活につながる教材づくり

## 5 研究の内容と実践事例

### (1) 4-4-4のまとまりを意識した6年間での指導内容の具体化

カリキュラムを考えていく中で、4-4-4（小1～4，小5～中2，中3～高3）の発達論が考えられている。特に、「体づくり運動」は、小学校1年から行われるようになること、小学校段階では、1～4年，5・6年という2つの発達の段階があることなどから、その4-4-4を意識したカリキュラムを考えていくことが大切になる。

本校では、特に、小学校高学年における「体づくり運動」の指導を具体的にどのように進めていくか考え、小学校指導要領にある4つの運動（『動きを持続する能力を高める運動』『体のやわらかさを高める運動』『力強い動きを高める運動』『巧みな動きを高める運動』）をバランスよく行うために、次のような教材を扱い、授業を実践してきた。

特に、扱う教材は、子どもたちの挑戦意欲がわくもの、日常生活にもつながるものであるように工夫してきた。

#### 【動きを持続する能力を高める運動】

- 短なわ3分間跳び…日頃より行っているなわとびを導入場面に取り入れる。始めに、3分間跳びでの体力測定（回数，終了後の脈拍数，自分の内的感覚）を行い，毎時間，曲を流しながら行う。単元の終末では，再度，体力測定を行い，始めと比較し，持続する能力が高まったかどうかについて調べる。

#### 【体のやわらかさを高める運動】

- ブリッジボール通し…体幹部分の柔らかさを高めるために，ブリッジした状態でペアにボールを通す運動を行う。最初は，小さ



なボールから始め、しだいにボールを大きくしていくことで、より体の柔らかさを高めていく。

- 長座ひも通し…長座の姿勢で、上体を倒す体の柔らかさを高めていくために、長座ひも通しの運動を考えた。足先の箱の上につけた塩ビ管（移動可能）にひもを通す。自分の体から離れたところにある管にひもを通すことで、体の柔らかさを高めていく。



#### 【力強い動きを高める運動】

- ターザン…ぶら下がることで、腕の力をつけていくことができる運動として取り上げた。ターザンロープにぶら下がったり、ゆすったり、2本を持ってブランコのようにしたりしていく。



- 腕立て新聞配達…自分の体を支える力を高めたいと考え、腕立ての姿勢になって、その手の下に敷いてある新聞紙を、ペアが抜くという運動を考えた。一瞬であるが、体が浮くことになり、支持する力とともに、バランス感覚が必要になる。

- 半回転シューティング…腹筋やバランス感覚を高めていくために、すわった状態で、足先にボールをはさみ、おしりを支点として回転しながら、ボールを箱に入れる運動を考えた。床、いす、平均台と座る場所によって、難易度が増す。特に、平均台は、バランスをとりながら、腹筋に自然と力を入れていく効果が期待できる。

- 3人綱引き…引っ張る力を高めていくことができる。ロープを三方からひっぱって、綱引きをする。引っ張る先にカラーコーンを置いたり、友だちにタッチをしたりして引っ張る目標を定めていく。



#### 【巧みな動きを高める運動】

- 竹馬…バランス感覚を高めていくことに最適な用具である。できる、できないがはっきりするが、できた時の喜びは大きく、また、高さや歩き方、コースを変えるなどの運動の工夫ができる。竹馬については、次のように段階を考えた。

- レベル1：ペアに支えてもらって歩く。
- レベル2：一人で歩く
- レベル3：高さを変えて乗る。
- レベル4：いろいろなコースを歩く。



## 【事例1】

《4つの運動要素を含んだ運動の中で、竹馬を選択し、挑戦意欲を持ち続けながら、乗れたことを実感していったM児》

～5年「ボディ・ラボ」（体力を高める運動）～

### 第1時 オリエンテーションの場面

自分の生活場面から自分の体力の状態について振り返ったり、体力とは何かということを考えたりした。また、自分がつけていきたい力を高めていく運動として、本単元として取り組む4種の運動（3つのゾーン：「柔軟ゾーン」「竹馬ゾーン」「パワーアップゾーン」）の行い方を知ったり、正しいやり方での体力測定を行ったりした。M児は、自分の体力について考え、高原学校の体験をもとに「自分は体力がない。」「他の人と同じように（運動が）できるようになりたい。」と学習カードに記録したり、つぶやいたりした。

### 第2時 各ゾーンの中から竹馬に挑戦する場面

これまで、竹馬の経験がなかったM児は、補助付きの竹馬に挑戦するが、前に足を出すことはもちろん、立つこともなかなか難しい状態であった。一緒にやっているペアのY児は、竹馬を前から支えたり、「足を少しずつ、前に出せばいいよ。」と声かけをしたりした。



### 第5時 ペアのアドバイスを受け、ターザンロープや竹馬に取り組む場面

M児は、Y児とターザンロープの場所へ行き、ぶら下がることから始めた。初めてやった時は、ぶら下がることがなかなかできないM児だったが、Y児や近くにいる子に「もうちょっと上の方を持ってみたら。」というアドバイスを受けて、繰り返しやって挑戦してきたりして、少しずつぶら下がる時間を伸ばすことができるようになった。



次に、竹馬に挑戦したM児は、ペアに竹馬を前の方で支えてもらったり、「いいよ。いいよ。」「もう少し、竹馬を前の方へ倒してみたら。」等のアドバイスをもらったりして、補助のない竹馬で歩くことができるようになっていった。



### 《単元最後の学習カード》

『わたしは、ターザンロープ、竹馬、ブリッジをやりました。ターザンロープでは、前よりも少しぶら下がることができよかったですし、竹馬も前は、1、2、3歩しか歩くことができなかったけれど、12歩も歩くことができ、とてもうれしかったです。』

## 【考察】

高学年では、子どもたちがどの運動がどのような体力を高めていくのかということ意識していくことが重要であると考え、本単元では、第一時のオリエンテーションの中で、自分の体力や運動に関する生活を振り返る場面を設定した。

また、高学年で高めていきたい体力は、4つの運動とされている。そこで、4つの運動要素をバランスよく行うことができる場を用意し、その中から自分にあった運動を選択する中で、子どもたちが、「体がやわらかくなった。」「バランスがとれるようになってきた。」などのような実感ができるようになっていけるようになってほしいと考え、本単元「ボディ・ラボ」を行った。

M児は、運動への意欲はあるが、運動経験の少なさから体が思うように動かせず、苦手意識があり、できたという達成感がもてない子であった。この単元で、M児は竹馬と出会ったことで、自分でもできそうだという感覚をつかみ、校外の運動講座にも自ら参加し、竹馬に乗ってみたいという気持ちを強くしていった。最初は補助つきの竹馬で挑戦するが、なかなかできない。しかし、友だちのやっている姿を見たり、ペアのY児に「足を少しずつ、前に出せばいいよ。」とアドバイスをしてもらったりして、少しずつ竹馬に乗れるようになっていった。学習カードにもあるように「12歩も歩くことができた」というように、できた実感を持ち始め、竹馬に乗れる楽しさを感じ、「もっとやってみよう。」「もっとできるかもしれない。」という思いにつながっていったと考えられる。

本単元を展開する中で、児童の様子から、高学年の体づくり運動（体力を高める運動）の指導内容として、次のことを大切に考えていくことにした。

① 「体力とは何か」という学習も位置づけながら、子どもたちの実情に合わせて行っていく。（中学への前段階として）また、同時に、運動の後で、「これができたことは、こんな力がついてきたからだ。」というまとめの学習を充実させていく。

（オリエンテーション、学習カードでの自己評価）

② 4つの運動要素をバランスよく授業に取り入れながら、5、6年の中で、特に「巧みな動き」については、重点をおいていく。（各ゾーン）

③ 中学年からのつなぎとして、「多様な動き」づくりが十分に行われているか吟味し、いきなり難しいことを行うのではなく、身近な素材から進めていく。また、たくさんの教材を扱うのではなく、少ない中でも、子どもたちが、できたことを実感できる教材や運動の選択や工夫を自ら行えるような教材を扱う。

（竹馬、ターザンロープ、ひも通し等）

## （2）「できた」「わかった」実感が伴う教材づくり

### 【事例2】

《目には見えない成長ホルモンの分泌量を示した透明シートを、自分の生活表と重ね合わせたことで、体のことや生活のあり方に関心が高まったN児》

～3年 保健 「毎日の生活と健康」～

N児は、「毎日の生活と健康」の学習で、自分の1日の生活を見返しながら、1日の生活時間がわかる表にまとめていった。1週間の生活を見て、周りの友だちに「（寝るのが）遅いだらう。」と言っていた。また、学習カードでは「ねるのがおそかったり、起きるのもおそくなったりしている」と書いたN児であった。

教師の「早く寝るとどうしてよいのか。」という発問に、子どもたちから、「たくさん眠れる。」「早く起きてゆったりできる。」「早く起きると気持ちがいい。」等、たくさん意見が出てきた。N児は「早く寝ることで、朝、調子がいい。」とカードに記録した。

教師は、朝の体の調子に注目している子どもたちに、寝ている間の体のことも知ってほしいと考え、養護教諭の話を見せた。養護教諭の話は、よく寝ることで体や頭の疲れがよくとれること、寝ている間に成長ホルモンという体を成長させるものが出ていること、頭は起きてから3時間たないとすっきりしないこと等を話した。特に、成長ホルモンは、9時頃寝てから1時間半後に一番分泌されていることや、11時頃に寝ると、分泌量が極端に少ないことを話した。それを聞いていたN児は、うなずいたり、驚きの表情を浮かべたりした。

その後、教師から配布された成長ホルモンの分泌量を示した透明シートを、あらかじめ持っていた自分の生活表と重ね合わせた。すると、「オーノー」と言いながら、頭をかかえこんでしまった。授業のまとめで、N児は「習い事の練習を早く終わらせて9時には寝たい」と学習カードに記述した。



N児は、学習した翌日からは毎朝のように「ピアノを早く終わらせて9時に寝たよ。」「宿題をやっているが遅くなっちゃったから、途中でやめて朝起きて続きをやったよ。」など様子を伝えてきた。また、お家の方からも「保健の学習をしたことで9時に寝る意識が高まり、頑張っています。家でも協力していきたいと思います。」と連絡ノートが届いた。

#### 【考察】

N児は、9時20分に寝て7時に起きる日もあれば、11時過ぎに寝て7時30分に起きることもあり、生活のリズムが乱れていた。自分の1日の過ごし方を生活表にまとめたことで、そのことに気づいたN児であった。教師は自分の生活をもっと深く見つめてほしいと願い、専門的知識をもち、子どもたちの健康により深くかかわっている養護教諭とのTT指導を組んだ。N児は、養護教諭の話から、寝ている間に体の中に何が起きているかを知り、さらに成長ホルモンの分泌量を示す透明シートと生活表を重ねあわせることで、自分の寝ている時間には、ほとんど成長ホルモンが出ていないことに気づき、ショックをうけた。それから、自分の生活時間を改善していこうという関心が高まり、それ以後も、家庭で取り組んでいる姿が見られる。

これは、本来目には見えない成長ホルモンの分泌量に注目させ、その分泌量の変化をグラフで示したり、目に見える状態の透明シートにして生活表を重ねあわせたりしたことによって、自分の就寝時刻ではいけないということに気づいたからであると考えられる。また、それが、生活のあり方を改善していこうという意識に結びついたと考えられる。

### (3) 仲間との豊かなかわりがうまれる学習指導過程の工夫

これまでの研究から、学習中の子ども同士のかかわりが、運動の技能を高めたり、運動への意識を高めたりすることにおいて、大変重要であるということをも、再認識してきた。仲間同士のかかわりをもたせるために、授業の中では、お互いにアドバイスをしあう「アドバイスタイム」や、友だちのよかったこと、がんばっていることを一言で言い合う「一言プレゼント」そして、見合う時間の設定を必ず1時間の中に位置づけるなど様々な手だてを考えてきた。また、

仲間とのかかわりが必要感のあるものとなるように、教材の工夫や指導の仕方など、学習過程の工夫を考えて、授業を行ってきた。

### 【事例3】

## 《仲間と共に運動のコツを確かめ合いながら、巧みな動きを高めるためのボール操作する運動に夢中になって取り組んでいった事例》

### ～5年「ボールをあやつれ」～

T児は、S児と、「ボールをあやつれ」の単元で、股下パスの運動を選択した。始めに1 m 5 0 cm間隔でやってみると、すぐに成功することができた。その後、何回も何回もパスを繰り返した。

#### 第3時 ペアの運動を成功させるために練習する場面

T児は、S児と距離を離しても、ボールキャッチを成功させるというめあてをもって、取り組み始めたが、ボールがバウンドしてしまったり、お互いの位置から大きくずれてしまったりと、前時にできていたことが、うまくいかなくなった。しかし、練習している中で、「股下ファイト」と言いながら投げると成功することがあり、声をかけあいながら取り組み始めた。



T児は、S児と股下パスの運動を続けてできるようにしたいと考えていた。壁に掲示してあるコツカードから、股下パスの運動が「いいよ。いいよ。」などとお互いに声をかけていくとタイミングがつかみやすいことをつかんだ。また、声をかけあって練習していく中で、「両方の手に同じ力をかけてボールを振り下ろす感じでやる。」というコツや「ボールを投げるのは、山なりに投げよう。まっすぐ投げるとバウンドしちゃってとりにくい」「肘を自分の足から相手の方へ出すようにすると、相手が股下から逆さまに見え、コントロールがつけやすい」などのコツをつかみ、学習カードに書いていった。コツをつかんだT児はS児とともに、繰り返し練習を行った。

#### 第5時 発表会の場面

T児はS児と発表会に臨んだ。発表会では、6 mほど離れた距離で、股下にボールを通す姿勢を保ったまま、30回ほど、ボールのパスをやり通した。クラスの子どもたちに「すごい。」と賞賛され、笑顔を浮かべた。

### 【考察】

この単元では、ペアで取り組んだ運動について、こうしたらできたという方法や体のここをこんなふうを使うといいと言うような感じ方や動き方を「コツ」として大切に扱い、学級全体で、掲示用模造紙にどんどん書き込むようにしてきた。また、ペアで行う運動であることから、ペアで見つけた「コツ」を全体の場に出せるように指導してきた。

T児は、S児と呼吸を整えて息を合わせることの大切さをコツカードからつかみ、二人で、そのコツを確かめながら運動を行った。また、T児はS児とがんばろうという応援の声がけだけでなく、その運動をどうしたらうまくいだろうかという「コツ」についてペアで確認していったために、股下パスでパスが通らなくなった時も、もっと距離を伸ばしてパスを通したいと考えた時も、意欲的に取り組み続けられたと考えられる。

発表の場面でT児は学級みんなに賞賛されたことによって、二人で体をより深く曲げたり、ボールの大きさや硬さを変えてみたりして、一番遠くに投げられる方法を考え、学級みんなにもっと説明したいという思いがうまれ、活動を意欲的にしていったと推測できる。

この単元の中で、ペアで声をかけ合ったり、繰り返し練習を続けていったりしたように、仲間とのかかわりを深めていくことができたのは、次の二点からであると考えられる。一つは、仲間とともにボールを通して一つの運動を行っていかうとしたこと、もう一つは、各自やペアが体を通してつかんできた運動のやり方を「コツ」として考え、学級で積み重ねていく中で、運動ができるようになっていったからと考えられる。

自分たちが目指す運動ができたということとともに、この体力が高まった（この運動の場合は、体のやわらかさや巧みな動き）ということ子どもたちに問い返したり、運動の事後学習の中で、意識させるように学習カードに記入させたりして、振り返らせたい。

#### （４）日常生活につながる教材づくり

昨年から三輪小学校では、校舎改築や、校庭縮小、プレハブ校舎での生活等活動空間が狭くなり、子どもたちの生活環境が大きく変化している。しかし、その環境の中でも、体育の授業を進めていかなければならないし、また、体力の向上を図っていかなければならない。

そこで、これまで以上に体育の授業の充実や、運動が行える環境整備が必要となる。特に、体育の授業で行うことが、日常生活につながっていけば、体力向上はもちろん、体力向上に対する意識も高まってくるだろうと考えた。

そこで、扱う教材は、特別な道具や材料がなくとも普段使っている身近な用具を工夫することでできる授業を考えていくこととした。

##### ○身近な用具を利用する体育の授業

「竹馬」や「ゴム」「輪」「ロープ」など、身近にある用具を利用したり、休み時間にも使える用具を授業へ積極的に取り入れていったりすることを考えた。

特に、１年生から利用できる教具として「タグ」の利用を積極的に進めてきた。各学年の実情に応じて、１対１やグループ対抗等を行い、子どもたちが興味関心の高い学習となっている。

##### ○限られた広さの中で行う全校運動の工夫

週１回、１５分間、体育館や校庭に全校が集まり、全校運動を行ってきた。

現在、校庭が大変狭いので、大きな動きのある運動を全校で行うことは困難であるが、連学年ごとに行ったり、低・高学年に分かれたりして運動を行っている。

- ・ラジオ体操第一、第二
- ・一人ストレッチ
- ・二人組運動
- ・馬跳び
- ・ゴム跳び
- ・クラス対抗ボール送り、輪通しゲーム
- ・大なわ
- ・短なわ
- ・リズム運動
- 等

##### ○全校の子どもたちがより多く運動に親しむことができる休み時間

サッカーを楽しむ子どもたちに独占されがちな校庭の状況から、サッカーで体を動かす子どもたちの姿も十分に認めながら、低学年や高学年女子も校庭で遊ぶことができるように、「ボールを使わないで遊ぶ日」を設けた。そこでは、ボールでなくとも遊ぶことができるように、ゴムひもやフライングディスク、小さな的当てボールなど、全校が遊ぶことができるように工夫をしている。また、一校一運動と



《運動週間中の体育館》

して今年「なわとび」「ゴム跳び」に力を入れている。そこで、全校運動や運動委員会の活動で運動のやり方を紹介したり、なわとびクラスマッチ、運動週間（体育館に跳び箱、マット、平均台等を常時設置する期間）を行ったりして、場づくり、環境づくりを行った。

#### ○運動が日常的になるような環境整備

廊下や校庭は、子どもたちが跳んだり、投げたりする運動ができる場を設け、目印となるようなテープや輪を貼ったり、ゴムひもを置いたりした。また、生活科室には、休み時間に子どもたちが利用できるように、羽子板や缶ポックリ、けん玉等を用意して、手軽に運動できるようにした。

さらに、校庭遊具は、安全面や校庭縮小等で、撤去されてきたのだが、安全面に考慮しながら、日常的に使用できる、PTAによる手作りの遊具を設置する計画を立てている。

## 6 研究の成果と課題

### 【成果】

- 1 子どもたちが、自分の体に関心をもち、どのようにして「体力を高めていくか」ということを意識しながら、楽しんで体力向上につなげていくことができる「教材づくり」「場づくり」について工夫をすることができた。特に、これまで扱われることの少ない「巧みな動きを高める」運動について考えていくことができた。
- 2 身につけたい力を明らかにして、子どもたちの意識を大切にしながら、「体づくり運動」、特に「体力を高める運動」の学習過程を考えていくことができた。特にその中で、オリエンテーションの重要性、単元の終末での指導のあり方について検討していくことができた。
- 3 仲間とのかかわりについては、「わかった」「できた」「楽しかった」ということを、子どもたちが実感していく上では、必要不可欠であることがあらためてわかった。また、その「かかわり」は、必要感のある「かかわり」でないといけないことがわかった。
- 4 保健の学習の中では、子どもたちが普段気づかないことや目に見えない物を、いかに気づかせていくか、目に見える状態にしていくかが重要であることがわかった。

### 【課題】

- 1 子どもたちが「できた」「わかった」「楽しかった」という達成感や実感（本当にわかった、日常生活にいかしていくことにつながったなど）を、単元全体を通して、毎時間もたせていくことが重要である。そのための教材の工夫、学習過程のあり方、学習カードの蓄積をさらに考えていきたい。
- 2 「体力を高めるためにどうするか」「体力とは何か」という知識面にあまり重きをおいてしまうと、本来、子どもが求める「楽しく」運動したいという思いから離れてしまうことになる。学ぶべき事を事前(オリエンテーション)や事後に学習しながら、子どもたちが「楽しく」運動に取り組めるように学習を考えていきたい。そのバランスが大切である。
- 3 「できた」「わかった」「伸びた」「楽しかった」につながる効果的な仲間とのかかわりのあり方を十分に考えていきたい。
- 4 体づくり運動についても、保健についても、それらの知識や運動が日常にいかされるように考えていきたい。体育、保健学習はもちろん、学校教育全体の中で、自分の体に関心をもって、運動したり、考えたりできる子どもにしていきたい。